

ぼくのおくさん★

夫婦 × アート × ESD

ゲストキュレーター★柴川弘子[ESD研究者] ……(イラスト)

柴川敏之展

拝啓

ぼくのおくさんへ

初めて手紙を書くよ。

何だろうね。この居心地の良さと悪さの共存する柴川家。

温かくてふかふかしていて居心地の良いこの部屋は。

でもたまに起こる雷と地震に怯えるぼく。

早くおさまらないかなあ、。。。

きっと近すぎてよく見えないんだと思う。

だから靴下なんかをどこにでも置いてしまうぼく。

こうやってずいぶん遠くに来て時間が経つと見えてくる存在の大きさ。



もつとほめてよー！

PLANET HOME

SHIBAKAWA Toshiyuki

ぼくのおくさん☆柴川敏之展 | PLANET HOME

BOKUNO OKUSAN ☆ SHIBAKAWA Toshiyuki Exhibition | PLANET HOME

会期 || 2018年9月8日[土] —11月25日[日]

会場 || つなぎ美術館

主催 || 津奈木町、つなぎ美術館、ぼくのおくさん☆プロジェクト実行委員会

助成 || (公財)水俣・芦北地域振興財団

招聘アーティスト || 柴川敏之

企画協力 || 柴川弘子(ESD 研究者)

漫画制作 || プブ(booboo.piyo)

企画 || 楠本智郎(つなぎ美術館 主幹・学芸員)

「ぼくのおくさん☆プロジェクト実行委員会」

実行委員長 || 松田 修

副実行委員長 || 一川大輔

実行委員 || 石田ミサ子、佐々木京子、堀田将豊、吉田 祥

運営スタッフ || 下川光代(つなぎ美術館嘱託員)、高木 堇(津奈木町地域おこし協力隊)

ごあいさつ

本書は、住民参画型アートプロジェクトの一環として2018年4月に始まった現代美術家の柴川敏之氏(1966-)による『ぼくのおくさん☆プロジェクト』の成果展として、つなぎ美術館で開催した『ぼくのおくさん☆柴川敏之展 | PLANET HOME』のカタログとして発行します。

柴川敏之氏は、日常の見慣れた品々を化石にすることで2000年後の未来から現代を俯瞰し、社会に潜在する数々の問題を露わにする展覧会を全国各地で開催してきた、日本を代表する現代美術家のひとりです。

柴川氏の住民参画型アートプロジェクトへの招聘が決定した2015年以降、柴川氏も当館も経験したことのない新たな展覧会を開催するため、さまざまなアイデアを出し合い検討を重ねてきました。そのような中、柴川氏が妻で ESD(Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育)研究者の弘子氏から皮肉交じりに「2000年後も良いけど、自分の足下(家庭内)が炎上しているわよ!」と言われたことを当館学芸員に話したことがきっかけとなり、当プロジェクトのアイデアが生まれました。

これまで、弘子氏は柴川氏の作品や活動に関して本人に感想を伝えることはあっても、制作や展示に関わることはありませんでした。ESD研究者の弘子氏をゲストキュレーターに迎え、事例を広く集めながら夫婦間の課題を切り口に社会問題を考える今回のプロジェクトの実施と成果展の開催は、柴川夫妻と当館にとってはもとより、おそらく国内外の美術館としても先例のない新たな試みとなりました。

現代美術と ESD は、類似点が多く親和性も高いと考えられます。本展が身近な問題を切り口に社会問題を考える契機になるとともに、現代美術と ESD の接近を促す機会になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

主催者

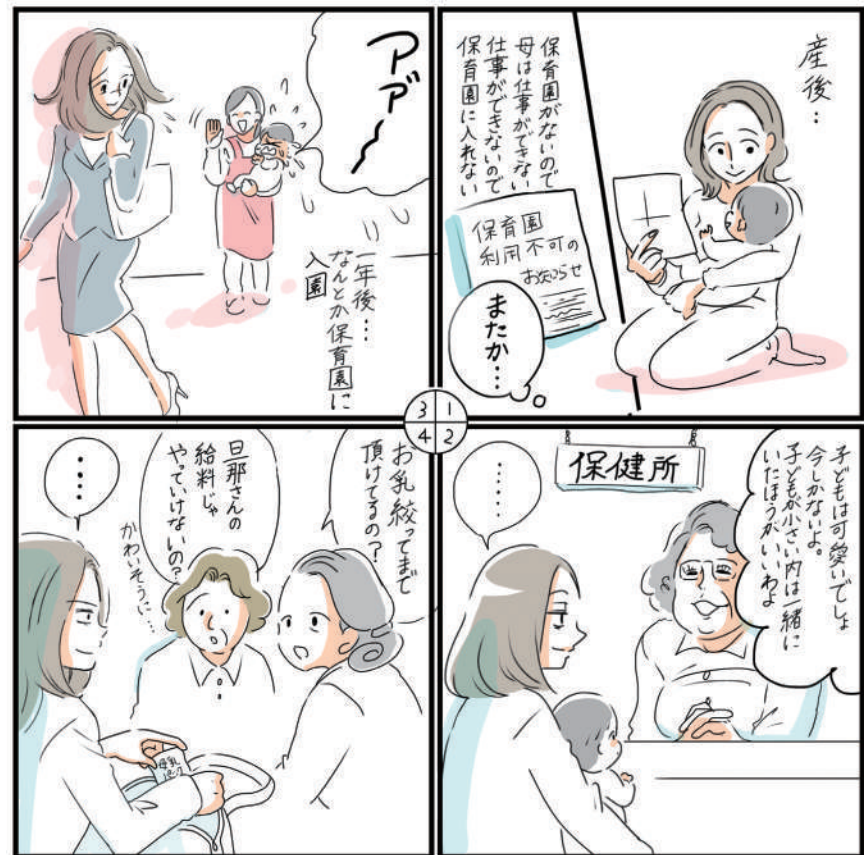
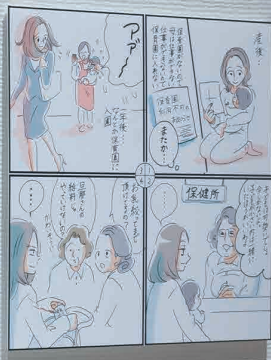
謝辞

本展覧会の開催にあたり、
多大な協力を賜りました関係者・関係機関の皆様に
深く感謝申し上げます。

目次

3	ごあいさつ
4	謝辞
6	論考 つなぎ美術館のこれまでと『ぼくのおくさん☆プロジェクト』 楠本智郎
14	展示配置図
16	プロフィール
17	タイムドキュメント
	会場風景
21	Home, Sweet? Home 楽しき? 我が家
50	Myths about Care ケアという神話
74	All Things in Universe パートナーたちの宇宙—森羅万象
86	夫婦の事件簿
134	論考 出来事／場／物 柳沢秀行
	エッセイ
140	未来の HOME と子ども食堂 原 明子
142	Art × Welfare × Local 一川大輔
144	世界の終わりを遠ざける方法 青木加苗
145	足元の未来 伊東竜馬
146	『ぼくのおくさん☆柴川敏之展 PLANET HOME』が学生に与えたインパクト 犬童昭久
147	公私混同のリアルが生む靴下の化石 大澤苑美
148	足下からの点検・再考のススメー「Bad Mother 万歳」「ダサイパパ 万歳」 岡本裕子
149	日常の中にある意外性 河合仁志
150	『ぼくのおくさん☆柴川敏之展 PLANET HOME』の副作用 斉藤博美
151	つなぎ美術館を訪れて 田中純子
152	社会の流れに対応できない産後支援 吉田明子
154	論考 絶望の中の希望 柴川弘子
165	関連プログラム
166	トークセッション「アートで迫る夫婦新悲喜劇！」
168	アーティストトーク、ギャラリートーク
169	ESD カフェ in つなぎ「未来の HOME—暮らし・コミュニティ・地球—を語る」
172	写真撮影コーナー、特別メニュー「鬼嫁コーヒーセット」、関連図書コーナー
174	作品リスト
177	柴川敏之 略歴

預けて働くって
ぜいたくなの？



1. 《Bad Mother 万歳》

初育児・保活・待機児童。

ハイヒールと搾乳機は妻にとって救世主だが、同時に罪悪感とプレッシャーが入り混じった思い出の品。

* 1-4の4コマ漫画は、人気インスタグラマーのブブ(booboo.piyo)氏による本展のための書き下ろし。



9. 《パンドラの箱》

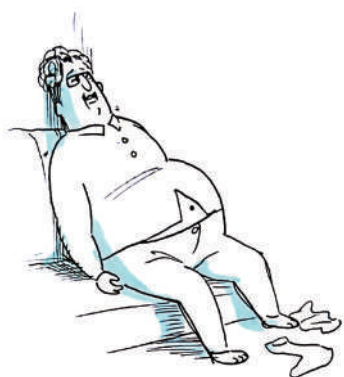
妻は余裕がなくなると、アート作品が無価値なゴミのように見えてくる。
 そのような社会こそ持続不可能ではないか、と我に返ることもある。

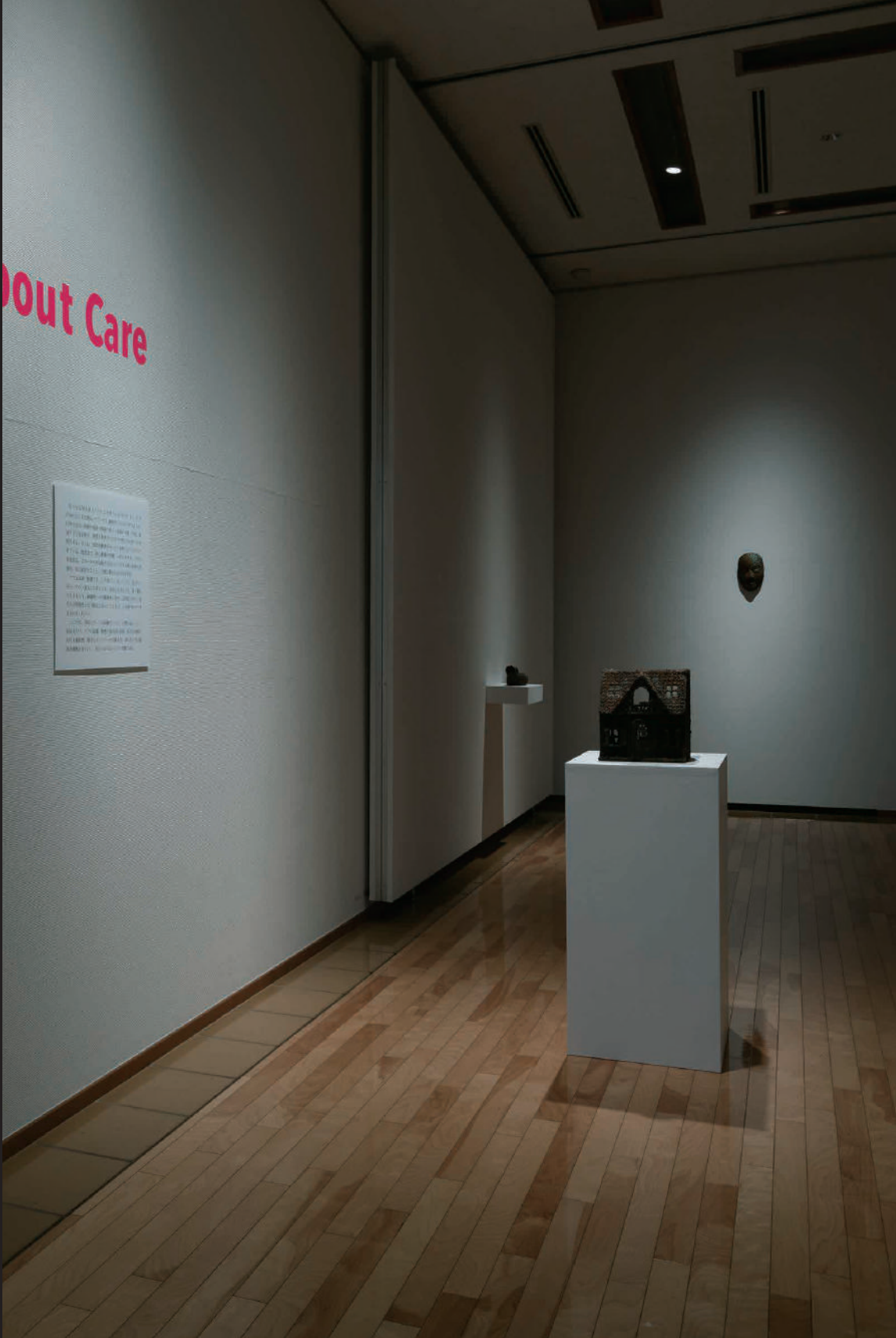




12. 《そこに置かれて》

床に散乱した夫の靴下を拾い歩き慣る妻。
夫は置いているだけと言う。
価値観、習慣、思想、文化の違いを
どう乗り越えられるのか。
会場内に10足の靴下の化石
(息子の靴下も含む。まさに再生産!)が
点在している。





私たちは何を最もケアして生きているのだろうか。ケア(Care)という言葉は、ケアハウス、緩和ケア、心のケアのように、日本では主に医療や福祉の場面で対人・直接の介護・介助、世話する行為を指す。愛情を要求されるケアの担い手は多くが女性である。さらに、移民労働者がサービスを担うようになってきている。低賃金で、時に無償の労働。いのちを育み、いのちを看取る。この「いのちを持続させる」という、人類の最も重要な仕事だが、常に私的なこととして脇に置かれてきているのはどうしてだろうか。

ケアは本来「配慮する」との意で、いま、ここで、見えていないのち―過去に生きた人々、未来に生きる人々、遠く離れて生きる人々、動植物―への配慮を含む。近代化の中で、私たちが利便性と引き換えに失ったこととは、この意でのケアする力かもしれない。

ここでは、ESDとアートの両軸で「ケア」を問い直していく、試みを行う。ケアの葛藤、理念と実生活の矛盾、社会の発展に対する違和感、様々なストーリーを交錯させ、家の内と外の境界を融解させていく、あるいはつないでいく実験である。

ケアという神話

Myths about Care



14. 《A Doll's House》

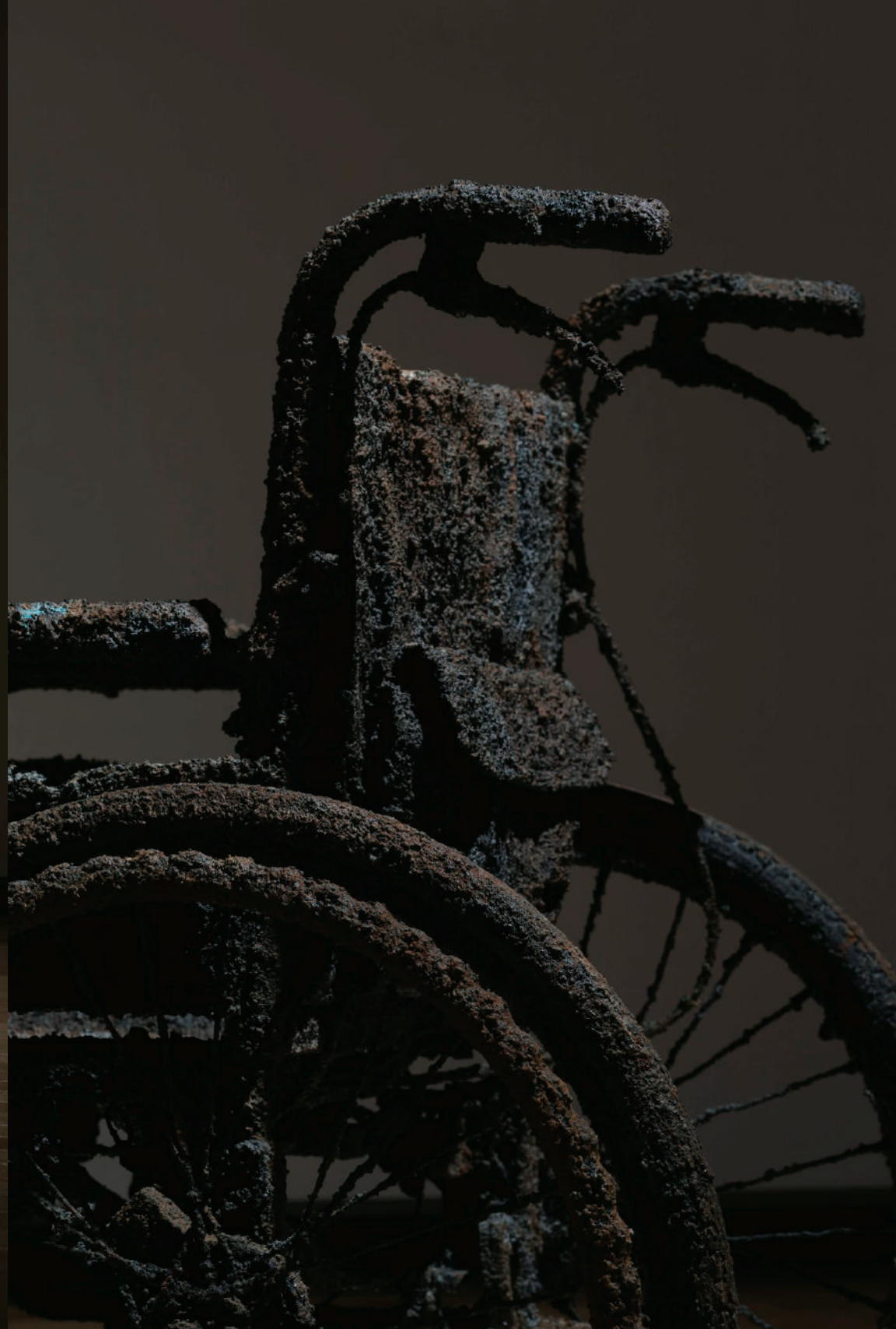
時代と文化を超えて人気のドールハウスは、薄気味悪いほどリアリティーに欠けて見える。人間として扱われていないことに気づいた妻が夫と家を捨て、19世紀の社会に衝撃を与えた戯曲『人形の家』（イブセン作）へのオマージュ。

17. 《Who CAREs?》

車椅子を押す、押してもらう。車椅子の姿は普遍的であるが、そこに触れる多様な心と身体、ケア関係、紡がれる無数の物語に一つとして同じものはない。

“Who cares?” = 「誰が気にするもんか？」

産業・資本経済中心社会において無き者にされてきた「ケア」を問うための作品。





No.	0007					
事件名	入れるべきか、見守るべきか、それが問題だ事件					
被害者	妻					
事件の詳細						
私は下戸だが、夫は毎日晩酌する。どんなに体調が悪くろうと、飲酒しない日はほぼない。だから日々量産される空き缶の管理は夫の役目。3年前にしゃれた蓋つきのごみ箱を購入。これで片付くと思いきや、なぜか蓋の上に空き缶を置き、一定量たまらなければ中に入れない。強風が吹くと、ベランダに散乱している始末。溜まったほうが入れるの面倒じゃないか？ 何かのおまじないか？ それともゴミになる前に、少しの自由を味わわせる温情措置か？ も、もしかして、コンセプトアルバムアートがここで生まれているのか？ 夫「別に意味はない」。意味ないんかーいっ！ それなら頼む、ちゃんと溜めずに入れてくれ。しかも潰して入れてくれ。ついでに、ちょこっと飲み残すのやめてくれー！！						
ペンネーム	ハラマキ					
結婚期間	15 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	鹿児島県					



No.	0008
事件名	タンカンでカンカン事件
被害者	妻
事件の詳細	
家具や照明などデザインの見立てについて揺るぎない自信を持つ夫。いつも妻に相談せずにアバンギャルドな決定・購入をするため、「なんで勝手に決めるのよ」、「嫌いだから返品してきて」、「一言相談してくれたっていいじゃない」と衝突の火種に。 (加害者の想い:「単管でテーブルの脚を作ったらインダストリアルでかっこいいぞ(夫)」→「それは、あなたの趣味です(妻)」、「キッチン雑貨はアレッシィで華やかにするぞ(夫)」→「わたしは嫌です、イッタラで揃えたいんですから(妻)」、と相談すると必ず妻から却下されるのです)	

ペンネーム	きび・だんご					
結婚期間	10 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	東京都					



No.	0009						
事件名	ぐるぐるドライヤー事件						
被害者	妻						
事件の詳細							
妻「いい加減、コードぐるぐる巻いてよね」。入浴後、髪を乾かした後のドライヤーのコードについて、ぐちゃぐちゃのまま直す夫。どうして、綺麗に巻いて直してくれないのか。何回言っても治らない。夫「妻から、ぐるぐる巻きにして直してと言われるが、巻くとコードが傷むし、今まで巻いて直したことなんてなかった」。この後、夫は戦いに敗れ、現在ぐるぐる巻きでの収納に統一されている。							
ペンネーム	メガネ橋						
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	熊本県						

No.	0010					
事件名	続ぐるぐるドライヤー事件					
被害者	妻					
事件の詳細						
妻「ぐるぐるしたら、収納してよね」。ドライヤー使用后、妻に言われた通りコードをぐるぐるにして置いておいたところ、ぐるぐるするだけじゃなくて、収納までしなさいよと言われる。妻「出しておくと散らかるから、ぐるぐるするだけじゃなくてきちんと収納してほしい。言わなくてもわかるでしょ」。ぐるぐる巻いたのに…。巻いた上に、収納しろと…。どうせまだ使うのに、めんどくさい…。ぐるぐる事件同様、夫が戦いに敗れ現在ぐるぐる巻いた後、収納をするようになりました。						
ペンネーム	メガネ橋					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					



No.	0012					
事件名	テレビつけっぱなし事件					
被害者	妻					
事件の詳細						
夫「テレビをつけっぱなしで眠っている」。妻「またつけたまま寝てるー」と思い、消す。夫「起きて、『それ見てるんですけど』と言い、またテレビの電源を入れる」。大抵、お笑い番組を録り溜めしているのを寝る前に見ていてそのまま眠る。そしてそのまま番組終了し、番組テロップが流れたまま朝を迎えている。						
妻「以前はテレビや電気料金も自分で払っているので呆れていたが、諦めていた。しかし最近では子供にはご飯の時は消せとかテレビ見る時間制限しているのに、教育としてどうかと思う!!」。夫「勝手に消さないで欲しい。同時に出来ることはしたい。夜のリラックスタイムくらい自由にさせて欲しい」。						
ペンネーム	テレビっ子よっしん					
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					



No.	0011					
事件名	洗濯物パンパン事件					
被害者	妻					
事件の詳細						
洗濯物干しを妻から任せられ、干していると妻からパンパンしてからほしてよ、しわっしわっやん。と指摘を受ける。任せたのなら、任せてほしい。パンパンめんどくさい…。(被害者の想い:「夫が干すと、洋服がしわしわになる」) その後、妻の言う通りパンパンをパンくらいで干すように。だけど、時々小さな抵抗として、そのまま干すことも。						
ペンネーム	メガネ橋					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					



アートで迫る夫婦新悲喜劇！

日時 || 2018年9月9日[日] 14:00-15:00

場所 || つなぎ美術館 展示室[1階]

出演 || 柳沢秀行(大原美術館学芸課長)

柴川敏之(現代美術家)

柴川弘子(ESD 研究者)

司会 || 楠本智郎(つなぎ美術館 主幹・学芸員)

ゲストの柳沢秀行氏は美術史の研究者であり、教育普及をはじめとする美術館活動の専門家でもある。つなぎ美術館の出張ワークショップを受け入れていただいたこともあれば、レジデンスプログラムにおける作家との対談のゲストとしてお越しいただいたこともあった。また、柴川敏之氏の展覧会を企画した経験があり、同氏を独身時代から知り、柴川夫妻を出会いから知る美術館学芸員のひとりでもある。実験的で前例のないアートプロジェクトの成果展でもある本展。これを読み解く手引きとしての役割も期待される開幕トークセッションのゲストに柳沢秀行氏は最も相応しいといえた。

トークセッションの冒頭、柳沢氏は表現の多様化に伴い美術の領域が広がると美術館も絵画や彫刻など「モノ」の展示だけではなく、アートプロジェクトなど「コト」の実施やそのプロセスの展示を通じて観衆の価値観の拡張を試みるようになったことを解説し、アートプロジェクトの成果展でもある本展の開催意義を伝えた。そのうえで、展示の詳細に触れ、本展を ESD とアートの親和性を巧みに利用した貴重な展覧会と評した。

柴川弘子氏は ESD の歴史を水俣病の問題と関連づけて説明したのち、現代アートへの関心が敏之氏との出会いを生み、紆余曲折がありながらも現在に至るまでの経緯を緊迫感とユーモアが交錯する

夫婦間のエピソードとともに話した。柳沢氏と弘子氏の話は笑顔で話しながら聞くだけでマイクを握ろうとしなかった敏之氏も中盤になり、柳沢氏から発言を促されるとようやく困った表情を浮かべながらも話し始めた。岡山の大学で教鞭を執る敏之氏は、展覧会とはいえ夫婦間の問題が周囲に明らかになることを恐れていたが、本プロジェクトが新聞や SNS で紹介されたことをきっかけに開き直ったら、気持ちが一気に楽になり、これまでにはなかったさまざまなアイデアが出てきたという。3名のトークは途切れることなく進み、社会と関わるうえでのアートと ESD の類似性や親和性についても、それぞれの立場から意見が交わされ、本展を読み解く手引きとしての機能も十分に果たした。終盤に柳沢氏の「夫婦は絶望から始めた方が良好な関係を保てる」という言葉に対して話しながら「国際社会においても相手や対象を理解したと思込むことが実は一番危ない」と応じた弘子氏。トークを聴き、展示をみた多くの人が、逆説的ではあるが互いに理解し合えるという幻想から逃れることも、互いの関係に希望を見いだすひとつの方法であることに気づいたのではないだろうか。

楠本智郎(司会)

柳沢秀行

公益財団法人大原美術館学芸課長。1991年～岡山県立美術館。2002年～大原美術館。日本の近現代美術史研究を基軸に、美術(館)と社会の関係についての調査、実践を行う。その一環として1999年にデビットホール(岡山市)での『41世紀からのメッセージ | 柴川敏之展』を企画。絵画や彫刻のようにモノとして存在するアートのみならず、世界の姿を見つめ、再認識を促すアートの在り方にも関心を持つ。